

聖徳太子御製の三經義疏がわが國上代の精神史上に有する大いなる意義に就ては既に先人の勝れた研究があり、殊には最近和辻哲郎氏がその「日本に於ける佛教思想移植史」(岩波講座「哲學」所收)の中に於て極めて簡明に敘述せられるところがあつて、今改めて説くを要しないが、就中法華義疏は當に太子自ら三經の中他の二つに勝つて重しとせられたのみならず、太子以後のわが國佛教の幹流となつた法華信仰の淵源をなすものとして特に注意せられなければならぬ。本書はこの御製法華義疏に就いて花山信勝氏が去大正十五年十月より二年間聖徳太子奉讃會の援助を得て研究せられたところの成果で、全卷六編、まづ御草本のテキストの吟味より始めて、御所依の法華經原本の考證、他の註疏との傳承關係の究明に及び、就中光宅の法華義記との間に法華經科文の對比研究を行ひ、最後にこれらの研究の結論として、法華義疏に現はれた聖徳太子の佛教の特質を論じてゐる。即ち太子の佛教はその御草本によつて窺はれるやうに單なる大乘ではなくして後に「一」の字を書加へて熟字とせられた所謂一大乘にあり、萬善を同じく一因として限りなき壽命と萬徳圓備の一大果に趣くことを以て理想とせられた絕對の平等思想であるとする、その解釋に於ては從來先人の説くところと必ずしも多くの相違を見出しえないけれども、然もその解釋の基礎として上述の如き綿密なテキストの考證を行ひ、幾多の圖表を複製して、既往の研究を總攬的に大成したところ、永く法華義疏研究の進據となるに足るであらう。(四六倍版本文四九六

頁、別冊圖版四六葉、東洋文庫發行、定價七圓)(以上柴田)

●正 神 史 五弓 久文撰

神史は維新前後に在世した備後府中八幡宮社司五弓久文氏の編著、正續合せて二十二卷、從來僅かに寫本として傳はり、見る人稀であつたのが、今回新裝を經うて開版され、世に現はれたのである。これ、宮地直一博一の指導により、國學院出の同人曾根研三氏が著者の後嗣五弓友太郎氏所藏の神史寫本を底本として、山本信哉博士所藏本を以て校訂し、續神史は校訂者所藏本を用ゐ、五弓家所藏自筆稿本を以て校合し、訂正を加へたもの。卷末附録として著者甥安二郎氏所撰の著者傳記を添ふ。正編は神武天皇甲寅東征の歲に起り、明治五年に至り、十七卷を成し、これに附志引一卷を加ふ。續編は更に明治六年より同十三年に及び、四卷より成る。すべて漢文編年體を以て、歴代を通じ、神社、神祇並に神道に關する事蹟を列叙し、首尾一貫、甚だ要を得てゐる。

著者は夙に史學に志を立て、儒を學んで通鑑を好み、明治に入つては修史館にも奉職し、嘗て尊攘を説いて今彦九郎とも稱へられた人。その精神はこの書にあらはされてゐる。著者の獻納した神史は今に内閣文庫の保有に係るといふ。この書が神武以前を記さないのは「舍人親王署して神代といひ、開卷一閱神ならぬはない」といふによるので、「神武以後諸事混同、神徳を載する專書がない、方今文明開化の世、新奇を弄して神典を

しらす」として諸書の神祇に關係するものを撰輯し、その採用書目は記紀以下明治年代のものまで百七十五種を算する。大日本史は本紀の端を神武に發して、神代は別に神祇志にゆづり、元祿に書かれた梅園氏の國史神祇集亦神武甲寅より始めたが、彼と此と較べるに互に入あつて自ら異を示すが故に、併せて參考になることが多い。南朝の正朔を立て、長慶を擧げたのは同史の影響もあらう。報本の志から三年餘をこの書に専心したと自ら詠歌に述べた。所載の神道論、史論には眞摯な彼の態度を窺はしめるものがある。

殊に、續神史は明治初明に於ける新政府の神祇に對した諸施設を考ふるの好伴侶となる。前の樋口氏の續國史神祇集と後の栗田氏の神祇志料との中間に出たこの書が、他二者が共に南北朝を以て打切つたに比べて、明治にまで及ぼしたところに價値があり、そこに出色もある。もとより、事の神祇に涉る歴代的事實を年序を逐うて叙列したにとゞまつて、新しい意味のまとまつた神祇史とまでは行かないにしても、史實を簡叙して一讀通覽に便ならしめた點は何といつても特色とすべきで、明治以後の神祇史への道程に立つものとして注目するに足る。類書が既に刊行された際、茲にとり遺されて入手し難かつた本書を今や新しく世に廣めたのは著者の本志に酬ゆるは勿論、今後の神祇史研究に好箇の資料と一段の便宜とを興へたものとして當事者の功を多としたい。(翁判七百二十三頁、附録十八頁、口繪圖版三葉、附録圖版三。定價金六圓。柳原書店發行)

● 伯家記録考

會根 研三編著

王朝の末から維新の際まで神祇官の長として王氏を稱し、神事を主宰し來つた伯家に關する文獻としては、一部例へば伯家部類の流布本や、白川家系圖又は神祇伯家學則並に神道通國辨義など神道叢書や神道叢説にも收められ、また官地直一博士の手に成る白川家文書記録解題といふが既にあるけれども、伯家に保存された數多い文書記録の大部が宮内省圖書寮に獻納されたま、世に出されなかつたのを主として、又家傳のもの、諸所藏のものなどを、嘗て同寮に在りし會根氏がまとめたもので、書名は宮地博士の命ずるところといふ。且つ、伯家に關係深い西宮神社の社司吉井良晃氏の援助によつて新たに刊行されたのであるが、この書が神祇の祕事に係り、故實行事にわたるものが多いわけで部數を限つて頒布されたにとゞまる。

内容は序論、本編、資料、附録、補遺の五編に分たる。序論には會根氏の總括的説述になる伯家記録に就いて、白川家獻本考、伯家記録沿革考、伯家略史を掲げ、本編は内侍所、奏帳女王、大嘗會、神祇官、諸社、神道説、日記備忘とそれ〴〵關係記録を類別して解題考證し、資料編には同様類別にその中稀觀の主要なもの、原文を校訂採録した。附録に伯家系圖、伯家家譜附庶流譜、伯家華押箋、伯家印刷集を收載し、補遺として宮地博士選伯家記録補遺、また圖書寮編修官補是澤恭三氏選葉室家藏記録、その他本編漏瀝記録のごとき諸種材料の解説をも

蒐載し、なほ山本信哉博士所述白川神道の研究を題目のみのまゝ、加へた。

つまり、序論の外には伯家關係のあらゆる文獻の解題を主とし、これと共に主なる資料の選輯であるが、由緒の深い伯家の祭儀行事、諸作法調度はこれによつて窺ふに易からしめ、なほ研究を要すべき白川神道なるもの、よなき案内書ともなるべきものである。これはひとり伯家學の考究者のみに便益するのみのもではない、殊に資料編中、大嘗會儀、神祇官年中行事、諸王の日記、又廣田西宮兩社の舊記文書などには一般國史の上にも裨補するものが見出されうるであらう。この書、項目の類別排列上になほ整理を要すべき點もあらうが、とまれ、斯かる特殊の業績が常人に企てられがたいのを祠人たる斯の人の手になされたことに、人なみならぬ勞を謝してよからう。(菊判六百三十三頁、圖版二十七。非賣品。西宮神社社務所發行) (以上加藤竹男)

●新羅史研究

今西 龍遺著

著者は私の先考である。昨年五月父の卒去後、逸早く藤田先生を主唱とする末松、田川等の諸氏によつて、遺稿出版のことが提議されたとき、私は感激と感謝の念に燃え遺稿の凡てを提出して、その整理出版の事をお願ひした。實は父の生前、著述の纏めて一書を成すものなく、折に觸れて、このことが話題に上ると、若し早晚死んだら之でも出版しておけと云つたのは、

父が平生雜誌類に發表したものの、中から選擇して一と纏めに綴ぢ、常住座邊にして加筆怠らなかつたものである。茲に於てか父の篋底の凡てを曝け出すといふことは多分にその志を無にするものであつたかも知れない。然し周圍からの從憑と私自らひそかに父の業績を自負する氣持とは自らの行爲を是正付けることが出來た。かくして既發表、未發表のものを總合した結果は、父の出版を希望したものの、數倍に達し、到底一二冊には纏め難いことが判明したので、之を適宜數冊に分つこととし、今回その第一冊として出版されたものが前記藤田先生其他の方々の編纂を仰いだ新羅史研究である。新羅史概説以下凡て二十五編、既發表未發表兩者は數に於て相半ばする。卷頭先づ飾るに恩師坪井先生の序文を以てしたことは、その朝鮮史研究の動機と全く先生の教導に負うた著者の述作として意義深きものと云はなければならぬ。

今内容の主なるものに就き順を追つて一瞥するに、先づ最初

の「新羅史概説」は大正四年及び七年度の京都大學に於ける講義草案を末松氏の手によつて補正謄寫されしもの。一新羅本源地の地勢、二新羅の建國、三建國傳説、四新羅の階級と官位、五新羅の興起、六新羅の中代、七新羅の下代、八新羅中代下代の外國關係の八章に分ち、從來の朝鮮史籍三國史記、三國遺事等に見ゆる新羅史の附會極まりなきを本原の姿に還元せんと試みてゐることに、著者研究法の一端を伺ふであらう。著者は晩年